慈光

第七卷　第十一號

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第八十号）

目次

信謗共に因と爲つて……花田正夫…（1）
池山御夫妻『信仰書簡』……（3）
衆禍の波転ず……近角常観…（5）
池山先生の追憶……松江岩人…（10）

信謗共に因と爲つて

花田正夫

覚如上人作の報恩講式の第二に、聖人の御持言がある。

『つねに門徒に語りて曰はく『信謗共に因と為つて、同じく往生浄土の縁を成ず』と。

誠なるかなやこの言、疑ふ者も必ず信を執り、謗る者も遂に情をひるがへす。まことにこれ、仏意相応の化導、そもそもまた勝利広大の知識なり。悪時、悪世界の今、常没流転の族、若し聖人の勧化を受けたてまつらずんば、いかでか無上の大利を悟らん。』

更に教行信証の末尾に、同意味のことを、

『唯仏恩の深きことを念じて、人倫の嘲を恥ぢず。もしこの書を見聞せん者は、信順を因と為し、疑謗を縁と為し、信楽を願力にあらはし、妙果を安養にあらはさん。』

又、聖覚法印の唯信鈔の末文に

『念仏の要義おほしといへども、暑してのぶること、かくのごとし。これを見むひと、さだめてあざけりをなさむか。しかれども、信謗ともに因として、みなまさに浄土にむまるべし云々』

以上、報恩講式、教行信証、唯信鈔、と併せて拝読するに、『更に親鸞珍らしき法を弘めず。如来の教法をわれも信じ、人にも教へ聞かしむるばかりなり』の平素の思召しを懇々として手にとる如くにうかがはれる。そこに『仏意相応の化導』が聖人の上に印現して、その自然の返照の結果として『疑ふ者も必ず信をとり、謗る者も遂に情をひるがへす』と建現したのである。

疑謗の縁

念仏の法難、流罪八人、死罪四人、聖人は越後の国に五年の適居。その一日一日を念仏の中に越えられた聖人は、そこに念仏疑謗者へのおのづからなる執るべき道が定まつてゐるのを拝する。そして後年に関東の念仏者の上に障害やら疑謗の問題が起ると、その渦中にある人々に、種々と御体験を語り示されてゐるのが、未燈鈔や御消息や歎異鈔等にあちこちと散見される。

聖人は先づ、信謗共にあることは仏がすでに説きおかせられてある、この法を謗る者を『無眼人、無耳人』と経に誡められてあり、善導大師は『五濁の世には疑謗も多く、道俗共に念仏をきらつて聞かうとしない。若し修する者があれば、いかり、やぶり、うらむ』と明らかに釈しおかれてゐると教へられてゐる。又御師匠、法然聖人が『念仏申す人々は、かのさまたけをなさん人をば、あはれみをなし、不便に思うて、念仏をもねんごろに申して、妨げを為さんを助けさせ給ふべし』と申され、『二十五日の念仏』勤修もさうした願ひから出てゐるのだと、師説を挙げられてゐる。

これ念仏疑謗者に対する絶対的御対度である。そこには『我是なり他非なり』との相対五分五分の対度は見られない。そこをうけて歎異鈔には『今の世には、学問して人の謗をやめん、ひとへに論議問答せんとかまへられ候にや云々』と誡められて『これ併しながら自らわが法を破謗するにあらずや云々。たとひ諸門こぞりて、念仏はかひなき人のためなり。その宗浅しいやしといふとも、更に争はずして、われらが如く下根の凡夫、一文不通の者の信ずれば助かるよし承りて信じ候へば、さらに上根の人のためにはいやしくとも、われらがためには最上の法にてまします。たとひ自余の教法はすぐれたりとも、自が為には器量およばざればつとめ難し。われもひとも生死を離れんことこそ、諸仏の御本意にておはしませば、御妨あるべからずとて、にくい気せずば、誰の人かありて仇をすべきや云々』と教へられてゐる。ここに陽光の下に霜雪の消される如く、仏心のまことに疑謗のさはりがとかされて行く。

信順の因

次に信順の人に対されて聖人は『ひとへに弥陀の御催にあづかりて念仏申し候人』として『御同行、御同朋』とかしづきしたしまれてゐる。そこには『親鸞弟子一人ももたず候』とのすつきりとされた麗容を仰ぐ。

歎異鈔の九条では『念仏申し候へども踊躍歎喜のこころおろそかに候こと、またいそぎ浄土へ参りたき心の候はぬは如何にて候べき』と聖人におたづね申した時『親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこころにてありけり云々』と我等と同座されつつ『他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしく覚ゆるなり云々』と御身にかけて知らしめて下さる。

聖人は、先達振るとか、後世者振ることを深くいましめられつつ、念仏者を『真仏弟子。親友。上々人、好人、最

勝人』更に『如来に等し。便同弥勒菩薩』と称へられ『四海のうち皆父母兄弟』と睦み親しんで下さる。

謗る者にも無私の対度で接せられる聖人は、信ずる者へも無我の対度で引接して下さる。そこに私の如き、辨慶の七つ道具を身につけて、隙もあれば打ち込まうと待ちかまへてゐる者も、聖人の御心にふれては、つつかかることも、嚙みつくことも出来ないで、七ツ道具を持つたまんま『さうであります。御尤であります』とおのづと仏の絶対の真実心がしみとほつて参る。いなむことの出来ない、はばむことの出来ない真実にとかされて参るそれにつけても、嘸聖人ましまさすばと渇仰し奉るばかりである。

昭和卅年、十月卅日。

池山御夫妻『信仰書簡』

拝啓、日増にお寒くなりますが……。偖て早速ですが、今日は、あなた様に喜んでいただいたり、又一つにはお願ひ申上度きことが御座います。どうぞまはらぬ筆ながら、およみ下さいまし。

私事御存じの通り、かねてレウマチスにて病み居りましたが、七月以来、非常に胃が悪くなりました。それも矢張り服薬の作用で胃を悪くすることと存じ、医師より健胃薬などもらひ致して居りましたが、益々やせるばかり、元気は少しも変りませぬが、食事も漸く一ぜんやつといただく位。あまり衰弱いたしますので、病院に行き見てもらひましたら、胃癌とのこと、あからさまに、それとは申しませんが、それを聞きました時の私の失望、何とも申しやうが御座いませんでした。八十六の老母、及び生母も七十余の老人をあとに残し、五人の子供のあと〳〵の始末、主人のこの後の不自由を思ひまして、実に上気いたさん許りでした。

併し、どうぞ御安心下さいまし。この刹那の非常の失望と同時に、ハツト如来のお慈悲と申すことに心づき、アアもう、なつかしいと申したところで共に暮せるものでなし、もう手をひいて下さるあなたにお任せするより行く処はないと心づくと共に、胸もはりさけるほどの切なさが、スーツと開けまして、アアこの病氣が萬一主人であつたらどうであろう。財産はなし、老人子供をかかへ、病夫をかかへ、長い間には収入の途も絶へ、そのむごたらしさは如何ばかり。アア私であつてさんな喜ばしいことはない、是も皆おはからひによる処と、スツカリと元気も直り、平気で病院より帰つて参りました。

併し、帰宅後、主人、寿夫、らく子に右の次第を申しましたところ、その歎きは非常で御座いまして、主人は、今までの苦労を気の毒と申し、子供は、わがままばかりして、誠にすみませんでした、ゆるして下さいと申しては泣きますし、両三日と申すものは、どうもかうもならぬ程でしたが、信仰のありがたさ、主人もすつかり思ひなほし、この頃では、最早、私は死したるもの故、一日〳〵と生きのびさせていただいてゐる、アア有難い事と喜んで、養生と服薬とを怠りなく致して居ります。

病院ではこの冬中いかがと申したのださうですが、私の立場としましては、明日であらうと、また、半年後であらうと変りはありませぬが、子供の為には、一日でもながく居る方よろしくと、主人も申して居ります。

それで、誠に、御忙しい中、申し兼ねる次第ですが、枕もとへ立てる二枚折へ、あなた様の何かおかきになつたものを張り度いと存じ、主人に申しましたらお願ひして送つていただく様にと申しますから、どうぞ一筆御しるし下さつて、御送りのほどお願ひ申し上げます。今夏鞆で書いて頂いたのは、二つとも掛軸にして、朝夕ありがたく拝見いたして居ります。

生前、今一度御目もじ致し、親しくお物語り致したいのですが、何を申すも遠方のこと、幾十年の後には、又親しくお目にかかれることと楽しんで居ります。

不時の死と申すことも世間には多いのに、かくも夫婦親子、心のかぎり名残りを惜しむことも出来、又心の底から打ちとけて、あなたの御慈悲をよろこばせて頂くことの出来ると申すことは、如何なる幸と、主人とも喜んで、その日〳〵を愉快に元気に暮して居ります。

どうぞ奥様にも、よしなに御伝へ下さる様、ひとへに念じ上げます。どうぞ〳〵死後の処、何分々々よしなに願ひ上げます。早々。

十一月二十六日　　池山清

近角様

（求道、第十四巻第一号所載）

○

拝啓仕り候。愈御清安奉賀候。

陳者、あり得べきことをあり得べしとしらず、或は少くとも、しか知らざるにはあらねども、さることのきのふけうに起るべしとは、夢おもはざりし事の、突如実現して、今更ながら苦悩の娑婆と驚かれぬる煩悩の所為こそ、あはれにはかなきものにさふらへ。

さるにても百雷落ちかかりぬとおぼえし火宅無常の中に、忽然、ただ念仏の一道を決定し得て、衆禍の波、速に転じ、有りがたき菩提の岸、あきらかに、ここに夢のうち

のちぎりを終へて、さとりの前の縁を結び候事、何たる広大の恩徳に候や。

爾来信仰的生活の上に、嘗ては単に想像に止りしことども、着々事実として自覚経験するを得候こと、ひとへに摂護心光のお計ひのいたすところと、感佩罷在り候ふものから、尚依然として常に恩愛のひくところとなり、定聚之数に入るの喜びをして、おろそかならしむるこそ、かへすがへすも無慚無愧のこの身にてはさふらへ。ただ〳〵南無阿弥陀仏と申すほか別の途無之候。

先日は愚妻より御願ひ申候書きもの玉はり、難有存候。来春は一度御来岡願ひ度き存念に候。御都合よき折も候はば、御一報玉はり度候。

奥様よりもありがたき御手紙いただき、忝く存候。宜敷御鳳声玉はり度候。愚妻の容態目下さしたる異変無之候。

大正六年十二月十九日　　池山栄吉

近角盟兄座下　　謹言。

（求道、第十四巻第一号所載）

衆禍の波轉ず

近角常觀

『衆禍の波転ず』とのお言葉は、教行信証の行巻に『しかれば大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮みぬれば、至徳の風しづかに、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土に到りて、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵ふなり』

とあつて、如来の広大なる御めぐみによりて、多くの禍の波が、転じ変つてしまふといふ事を御話したいと思ふのであります。

先日来、岡山にゐる私の友人、池山氏の夫人が胃癌にかかられ、存命中に一度会ひたいとの事で、この御見舞に参つたのでありますが、も一つは、九州の貝島翁の炭坑が、昨年来爆発したのに対して、その四十九日に相当するために慰問に参つたのであります。

何れの場合も断腸の至り、悲惨の極まりて、色々の所感を得たわけで、慰藉に参り、お慈悲を伝へに参つた私が、却つて向ふの方から、多くの教訓と、信心のおいはれを頂かして貰つたわけであります。これについてお話をしてみたいと思ふのであります。

丁度一昨年のことであります。備後の鞆の港へ講話に参つて、池山氏とそこで面会した時に、この『大悲の願船に乗じて云々』の御文を書いて池山氏に贈つた処が、此度あつた時に池山氏の云はれるには

『一昨年あれを書いて貰つた時には「至徳の風静かに」までではよくわかつたが「衆禍の波転ず」には、これほどまでの深い意味のある事とは思はなかつたが、この度こそは非常に感じた』

とのことであつた。

この池山氏とは明治卅年頃一緒に洋行もし、非常に親しい間柄であるが、一昨年、鞆で会つた時は、従来の君とは非常に変つてゐたのに驚いた。

と言ふのは、氏は現に岡山の第六高等学校の教授で、人格の高い人であつて、西洋に行つた頃から、社会問題の大切なことを思つて大いに研究し、日本に帰つてからも、自ら商人となり、煙草屋をやつてみたりした。その頃苦学生を世話もしたのであります。

従来かういふ人であつたので、別にいちぢるしい信仰家といふわけではなかつたが、それが一昨年会つて見ると、『南無阿弥陀仏々々々々』と唱へて、しばらくもやむ時がない。私はどうも驚いた。『君はどうしたのか』とたづねると『どうしたといつたつて、かうなつたのだ』とばかりで、別にその内容はいはれず、変化の来たのは、五六年前からだといふ事であります。

私の講話の後『何か話をしてくれてはどうか』といふと『僕は聞きに来たのだから』といはれたけれど、強いて紹めるものだから『それでは』とて『廻心』といふ事について話された。

それを聞いて、私は初めてわかつたので、元来君は、非常に親孝行な人で、真面目な人でありましたが、しかも自分の心中を考へて見ると、実に汚ない、呆れた浅間しい事ばかりで、かういふ心が起つて来るといふのはどうしたことであらうかと驚かれた。そして、これではいけないと行き詰つた時に、ふと心に浮んだのは、歎異鈔の

『親鸞においては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よき人の仰せをかうぶりて、信ずる外に別の子細なきなり』

の御文で『ただ念仏のみである』と気付いたとの話であつたのであります。

かういふ次第で信仰に入られてからは、その信仰のいちじるしい事かつまた尊いことは、これを見るものが『た

だ人ではない』といつてゐる位であります。

昨年会つた時は、歎異鈔を独逸語に翻訳するの心を起されて、最早それも完成されて、独逸人もこれを読んで大に驚いたさうであります。

私共が人生いかんともしがたくて苦しんでゐる処を、如来はあはれみまし〳〵て『ただ念仏して弥陀にたすけられ参らすべし』と。

これが『大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮み』たのである。致方なきものを見すてぬとのお慈悲が『ただ念仏のみ』なのであります。

処が、信者の人々は『人生はしてみようがない。だから南無阿弥陀仏だ』と、念仏につきまかすやうにするので、それでは真の安心ではない。しようことなしの南無阿弥陀仏である。

ところが、さういふ事ではない。私共がつきあたつてしかたがない、それを如来はかねてより御覧下されて、しかたのないものを待ちうけて、助けねばおかぬぞとの南無阿弥陀仏である。

本願を船にたとへたのも、本願を聞かせて貰うなり、いかに罪深くとも、悩み重くとも、やす〳〵と浮ばせて貰うのだから、本願の船である。『突きまかせ』や、『すがりつき』では船とはいはれない。致方のない処をあはれに思ひ、まちうけてゐるぞとあるのが船である。

いつもいふ譬であるが、乱暴者の子供には、絹ものや、買つたものでは、到底着られないものだから、さういふ乱暴者が哀れ故、さういふものに着せんがためにとて、親は手織の着物をこしらへたぞといふ如くに、如来は、さういふものがあはれであるから、それを助けんとの広大なる御慈悲故、それを聞くなり『有難う御座います』と頂けるのである。

然るにこれが聞きやうが悪いと『自分は何も着られない、仕方がない、だからして、まあ手織でも着ませうかい』と、此方から決めこんでいふので、親の心は頂けてゐない。『人生はしかたがない。かうなれば念仏のみだ』というてみても、ただ心淋しいばかりでしかたがない。

誰れでも病気はいやだ。死にたくない。長生したい、美味いものが食ひたい、楽がしたい。けれども無常の人生に於いては、いやであつても死して行かねはならぬ。一朝炭坑が爆発しては三百六十余人が一時に死なねばならぬ。かかる惨事の好ましいものは一人もない。人力にて尽せるだけの設備に設備をかさねておいても、死なねばならぬ時には死なねばならぬ、思ふままには生きられない、心のままには暮されない。さういふ事はすべて出来ない。かういふ人生に泣き苦しんでゐるものがあはれであるから、さういふものをどこ〳〵までも同情を表し、やるせなく仰せらるる大慈大悲の塊が南無阿弥陀仏である。この御心よりあら

はれたのが、広大なる弥陀の御浄土なのであります。

○

この度、見舞つたといふ池山氏の夫人は、一昨年頃から何となく具合が悪かつたが、昨年の夏から腹に固い塊が出来たやうで気持がわるい。医師に診てもらつて、若しも癌だといはれたら大変だといふ心があつて、そのままにしてゐたが、不図感ずる事があつて、診てもらつたところが、『腹に固いものがあります』といふと、『それが問題だ』といはれる。『癌でせうか』、『さあ、それが問題なのだ』といはれた。

さうしてゐるうちに、いよ〳〵これは癌に相違ないと感ずると同時に、萬仞の谷底めがけて、一時にさあつと落されたやうな気持がした。上気するか、卒倒するかといふ心地がした。

するとここで気がついたのは、かくまでに失望落胆して致し方のないものを、やるせなく仰せらるるお慈悲であつた。他の事はない、お慈悲一つだと気がついてみると、嬉しいとも何ともいふ事が出来ない心地になつた。

それからすぐに思つた事は、『この病気は私であつてよかつた。若し主人であつたら大変だつた。収入の道も絶えてしまつて、しかも老母もある、大勢の子供もある。私ではどうする事も出来ない。これは自分であつてよかつた』と感じたといふ事であります。

それについて重ねていはれるには『これは殊勝な心からではなく、実は利益から割り出した考へではあつたけれども、自分でよかつたと気がついた時には実に有難かつた』と話されたのであります。

夫人が病院から帰つて、しばらくすると主人も帰られたが、玄関で令息が『お母さんは癌ださうです』と小声で告げられた時には『さうか！』とは云つたものの、心の中は乱れに乱れた。

池山氏は謹厳な方ではあつたが、時折りには『畳と女房とは時々新しくするのがよい』などと、夫人にからかつていられたさうであるが、この時、夫人は、池山氏に会ふとすぐに『このたびはお望み通り新しくなりますよ』と、いはれたものだから、実に困つてしまつて、何ともいへなかつた。子供達は『今迄お母さんのいふ事を聞かないですまなかつた』と泣き叫んでゐるし、それまでは互に喧嘩したりなどしてゐたのが、互にかばひあつてゐるのを見ると、実に何とも言へない気持がしてたまらなかつた。が、さて気が静まつてみると、平日から喜んでゐた事ではあるが、『衆禍の波転ず』とは、なるほどかういふ味ひのある事であつたかと気がついた。これほどの事であらうとは思はなかつたと、大層池山氏も喜ばれた次第なのであります。

処が肝心の病人は案外元気に立ち働いてゐて、この機会に銅婚式を挙げたいなどとまで云うて居られた。病気になつてから夫人の信仰の特に著しく目に立つがために、病気見舞に来られた人々が集つて、信仰上の会なども結ばれ、夫人は心地よくこれに応接して居られるさうで、これで病人とは一向に思へね位であります。実に『衆禍の波転ず』である。

然し集る信者達は『ありがたい。不思議だ』とて喜んではゐるけれども、信者側の喜びと、病人の喜びとは、喜び方が大に違ふので、信者のは実に暢気なさわぎ方にすぎぬのであります。

然し要するに『大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮みぬれば、至徳の風しづかに、衆禍の波転ず』で、かかる言ひやうのない禍のありさまが、如来の広大なる御めぐみによつて、まるで転じ変つてしまふのであります。

大正七年六月号、法蔵誌より。

池山先生略譜

一、明治六年東京にて誕生。独乙語協会卒業。学習院教授。
一、明治卅年、宗教法案問題起り、後藤新平氏近角常観師と協同して句仏上人の法律顧問とならる。
一、明治卅一年、近角師と共に東本願寺より三年の欧洲留学を命ぜられ、近角師は世界の思想と宗教研究。池山先生は労働問題、社会事業研究。
一、明治卅五年真宗大学教授。
一、明治卅五年、神田須田町に煙草屋、徳光社創立。
一、明治卅七年、日露開戦により煙草専売となる。小売商となり、併せて久美油、絵葉書を販売。
一、明治卅八年、皮膚病はげしく、大学も退き荏原町に浪々の身となり、名古屋、大阪と転住。
一、明治卅九年、近角師、沢柳政太郎博士の斡旋にて岡山高等学校赴任。
一、大正二年頃、真宗に帰せらる。
一、大正七年五月、胃癌にて奥様逝去。
一、大正八年、独文歎異抄。
一、大正十三年夏、甲南高等学校に転ぜらる。
一、昭和三年、大谷大学に招せられ、十二年頃まで勤務。
一、昭和十三年十一月八日示寂せらる。

池山先生の追憶

松江岩人

(一) 鞆に於ける講演会。

大正六年の夏、村上鶴一さんの御尽力で、備後鞆町の私の寺で、始めて池山先生と近角先生とが一緒で御講話下さることになりました。

池山先生は奥様及びお子様五人を連れ、都合七人でお出でになりました。先生は高声でしきりにお念仏を称へられ『ほんとにお寺は有難い。心おきなく、自由にお念仏が申される』

と喜びなさいました。

近角先生も池山先生のお念仏申されるやうになられましたことを非常に感心せられました。

近角先生がしきりに勧められて、夜の会には、池山先生の演題は『廻心といふことただ一度あるべし』でありました。この演題を見て近角先生も驚かれました。

閉会後に近角先生の仰せに

『実は池山君が六ケ敷い演題を掲げたから、何を言ひ出すかしらんと心配したが、実に有難かつた。君何時の間にそんな立派な、深い信仰に到達したのか』

と感嘆されました。

池山先生はこの夜の講演で、御自身の体験から歎異抄を縦横無尽に説いて下さいました。その中で私が特に記憶して居りますのに『親鸞は父母孝養のためとて、念仏一遍だに申したる事未だ候はず』との御文を自己の体験の上から次の様に教へて下さいました。

『親鸞聖人はよく念仏を申されたが、それは自己の助かる事を喜ばれ、お慈悲の讃嘆、感謝、報恩の念よりお念仏されたので、親孝行と思うて念仏してはならぬといふことではない、親孝行のためと思ふ暇がないとの意味でせう。

それは、池山はよく歎異鈔を拝読いたします。母は之を大変喜んで聞きますから、時々母と共に読みます。他人はこれを見て、池山は大変な孝行者といひますが、私は実はお恥しい事と思つてゐます。それは母と一緒に読んで居ま

すけれども、一度だつて母の為に読むといふ念がおきて読んだことはありません。私自身が読みたくて堪りませんから読む。たまさか母が聞いて喜ぶから一人で読むも同じ事だから、ついでに母の所で読むかなと言ふ様な有様で、親孝行の為と思うて読んだことは、恥しながら一度もありません。

親鸞聖人のお念仏だつて然りで、たとひ御両親の墓前にひざまづき、御追慕の余り、合掌念仏されても、そのお念仏は、ただちに自己のたすかる感謝のお念仏で亡き御親に廻向する何物でもないと御述懐されたものと味はれます』と話して下さいました。

大正七年の夏も亦両先生の講演会を開催しました。この時、池山先生は独訳歎異鈔の原稿を持つて来て、近角先生と種々御相談して居られました。

(二) 池山家の悲劇

大正六年の十一月始めだつたと思ひます。奥様から親展状が参り、自分は胃癌を病んで居るとの事です。驚いて、その日長男を連れてお見舞に行き、一泊して夜二時頃までも話しました。

医師の診断で、すでに癌もすすんで居り、この冬が越せるかどうかと聞かされたとき、先生は脳震盪を起したかの感に打たれた様でしたとの御述懐でした。一時は悲哀に閉ざされ、二三日といふものは到底芝居にも見られない悲劇であつたとのお話でした。

併し有難いことには奥様は死に直面されたので、案外早く、いな、直ちにお慈悲に触れられ、安心立命して落付かれたらしかつたです。

先生も外の御家族もやがては信仰によりてお諦めがつき今度は反対に御家庭にはお信心の花盛りといふ誠にうるはしいお念仏の家庭が出現してゐました。

奥様は信仰によりて、第一主人でなくてよかつた。第二は此病気であつてよかつた。ただ食養生さへすればよいのですから、非常に経済的な病気です。自分で「おかゆ」を炊き、それを摺りて布で漉したのを小さい盃で一杯づつ随時に載いて居れば、胃の痛みも余りありません。

まだ一里位は歩けますから、日曜日には主人に案内され此世の見納めと思つて散歩をして居ます。それから私は近いうちに死ぬのですから、最早や頭の道具も着物も要りませんから、全部売つて新しく子供達のものを買つて造つてやつて居ます。又箪笥、行李等もぼつ〳〵整理して、死後皆が困らぬ様に片付けて居ります。

序に私が死んだら、子供も居ますし、後妻が要りますから、成るべく私が生きて居る間に決めておいて下さい、逢うて頼んでおき、安心して死にたいと申しますが、主人は

大変条件が多くて、そんな方は到底見つかりさうはありませんので、女中さんでも、又は婆やさんでも宜しいから、おとなしい方を世話して上げて下さい。私が死んだら松江さん来て葬式をして下さい等々。話がつきませんでした。

その間先生は、例の「フフーフワー」と微笑しながらお念仏をして居られました。

その時私は奥様に尋ねました。奥様はすでに御信心を喜ばれ、そんなに落着かれ、死を見るに帰するが如くですが歎異鈔には『久遠劫より流転せる苦悩の旧里はすてがたく、未だ生れざる安養の浄土はこひしからず候』とありますが、奥様は御浄土の近づく事が喜ばれるでせうな、と申し上げましたら

『いゝえ、私は少しも死にたい事はありません。一日でも生き延びたいです。主人のため、老母のため、子供達のため生きねばなりません。生きる以上は成るべく苦しみたくない。苦しみを見せて皆を悩ませたくない。これが私の義務だと思つて食養生をしてゐます。

未来のことなど何とも思つた事はありませんよ。矢張り歎異抄の通りですよ。併し今この通りお助けに預つて居ればこそ、気分だけはこの様に元気にお慈悲に護られて日を過させて貰つて居ります以上、未来も決して御見捨て下さらぬと確信してゐます。遠からぬうちにこの穢身は婆婆の縁がつきまして皆と別れを惜しみ力なくして終る時が来ると信じて覚悟してゐます。

お念仏はすべての事をよき様に解決して『今、々』を慰めて下さいます。子供達も此頃では私の一言一行を母の最後の教訓と受取つて呉れますので有難い事だと思つてゐます。

(三) 近角先生の御見舞法話会。

大正七年一月半ば過ぎであつた様に思ひます。近角先生がわざ〳〵東京から御見舞に御出になり有難い法話会が催されました。私も電報を戴き参加させて貰ひました。

近角先生も奥様のお元気なのに驚かれ、全く信仰の余徳だと感嘆されました。講演の始まる前に、夕方、六高の教授方や、その奥様連、池山先生の御同行達と、約二十人ばかりお夕飯の御馳走が出ました。お同行達の肝いりで二の膳つきの御馳走でした。近角先生には、奥様自身で御膳を持つて出されました。そして御自身も隅の方の末席に着かれました。

その時の池山先生の御挨拶は次の通りでした。

『実は今年が丁度銅婚式を挙げる年で、三四年前から少しづつ貯金をして居たのですが、図らずも一方の愚妻は近いうちに別れねばならぬ順序になりました。

幸に今晩は、東京からわざ〳〵近角先生が御見舞の御法話にお越し下さいましたので、折角皆様にもお招伴に聞い

て戴きたいと思ひまして、御案内いたしましたところ、ようこそ御集り下さいました。

これは甚だお粗末なお膳ですが愚妻が永らく御親切に御交際に預つた方ばかりですから、生別に死別をかねた積りのお別れのお膳だと思召してお上り下さい。何卒御ゆつくりと申上げたいのですが、時間が参りますと、六高の生徒諸君や一般の信者達も傍聴に来られますから、そのお積りでお召し上り下さい』

との事で、一座の者皆深い感激の中に、一口の御馳走もかみしめ〳〵信味を戴いた事でした。

それから時が参りますと聴衆も座敷に充満し、近角先生の御法話がありました。主として歎異抄の九条『力なくして終るとき彼土へは参るべきなり』との御文についての御感話であつた様に覚えて居ります。

御法話後、座談会に移り、奥様始め私も不審を尋ね。六高の生徒、お同行の感話や質疑応答と、ほんとに有難い会合で夜十二時を過ぎて居りました。

奥様は斯くて、其年五月下旬、遂に力なくして終られるときが参りました。私は残念ながら御臨終には間に合ひませんでしたが、御遺言通り電報により翌朝参り、初七日まで居り、納骨もさせて貰ひました。

先生はそれから約十年、独身で居られました様です。その間池山先生は、次々に、消極的に、また積極的に悩んでは御慈悲に立ちかへり、又悩んでは喜び〳〵で、

『真に、池山においては、ただ念仏して弥陀にたすけられ参らせて往生をば遂ぐるなりぢや。南無阿弥陀仏〳〵』

と、お念仏に生かされ〳〵歎異鈔を体得されました。否先生の一生涯こそは私にとりて、生きた歎異鈔でありました。

合掌

昭和十四年秋。池山先生一周忌追慕録『呼子鳥』

京都「一道會」の紹介

昨年十一月三日、京都市右京区山田開町浄住寺、榊原徳草師の御骨折で、池山先生の十七回忌を催しました。其時集つた者の願ひとして、年一回この十一月三日の休日に、成るべく都合して浄住寺に会し、先生の御霊前に旧交をあたため合ひませうと約束いたしました。

本年も榊原さんの御骨折りで案内状が各地に出されました。そして白井成允先生の御法話があり、池山家からは、神戸から二男敏朗さんと二女愛子さんと敏朗さんの御子様二人。更に備後の鞆浦から村上家を代表されてお孫さんの

幽香子さんが出席せられました由であります。

其他当日の出席者は、松本解雄氏、宮地廓慧氏、北岡行男氏、西元宗助氏、井上善右衛門氏、長田智竜師、御子息、同信会の杉原夫人、大津市の小島夫人、竜大生滝川君、其他の方々で十五畳の部屋が一杯のところへ山田稔さんが参会。以下榊原氏の御書簡を抜き書きいたします。

〃北岡氏は六高時代からの御縁の人で、先生の御好きだつた歌のレコードを今年も持参。紅葉が美しく映える秋の空に静かな歌詞が流れ、感無量でした。

先生が御好きだつたバラの花を高校の農学科から買ひ求め花瓶に一パイさしました。長田さん親子は先生の御写真の前で御焼香中に泣いて了ひました。

私の歎異抄の拝読は、昨年涙で読み難かつたものですから、本年は泣くまいと数日前から気をつけてゐましたが、冒頭からツマツテしまひました。それでも去年の三分の二位の時間で読了しました。

例の順々に所感を述べた時、北岡さんは、膝を揃へて座り直して、自分の未信のことを咄々と述べ、敏朗さんと愛子さんの眉を見て、先生の御姿をここに再び見ると言ひ、感激して居りました。

白井先生は池山先生の奥様の胃癌の時のお話、又満洲の撫順の炭鉱が爆発した時、向坊さんが『しまつた』と叫んで人事不省となつたが、種々手当して息を吹きかへした時念仏で吹きかへされた。その時、彼岸に生れられてもお念仏、此岸に生きかへられてもお念仏で、どちらにころんでも安心といふ話もありました。

西元さんは「先生のありそなこと」をシベリヤ抑留中に深く体感された話。井上さんは芦屋の仏教会館で種々の人の講話を聞かれたが、野間氏と共に池山先生のだけを筆録せられたとの由でした。

敏朗さんは『常日頃、考へるひまもなく。落ちついて父を思ひ起すことも出来ずにゐる私が、久し振りで、心豊かに父を偲ぶことが出来て、何とも言へぬ有難いことです』と述べられ。参会の皆様の前に手をついて御礼を申されて居り、愛子さんも口数は少なくても心から喜んで居られました。〃

以上が本年の一道会の模様でありますが、来年も、来々年も、御縁の方々の御参会をお待ち申します。場所は浄住寺、時は十一月三日午后です。京都駅から苔寺行きバス、一区手前の山田町下車であります。

× ×

慈光第七卷第十一号昭和三十年十一月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

編集後記

昨年の十一月三日は榊原徳草さんの肝入りで、池山先生の十七回忌を浄住寺を全開放されて勤修して下さいました。今年の命日には白井先生の記念法話を中心にして、晩秋紅葉深き浄住寺で一道会を催して下さいました。

私は参加出来ませずたまらぬ心をぢつとこらへて、本月号の慈光誌に、池山先生の特輯をいたしました。池山先生御夫妻と、近角先生と松江様との間に、無限に交流してやまぬ信の流れ、どうか御汲み取り願ひます。

○白井先生は長く浄住寺様に仮寓して居られましたが、本年夏、御家を寺の附近に新築せられ、晩年を祖聖終焉の地に定められました。京都市右京区葉室町であります。

○カリホルニヤのストックトン市の仏教会の北条恵実さんの通信によりますと、八月末にニューヨークの効外の仏教大学の校庭に十四尺の聖人の銅像が、篤信者広瀬氏の寄贈により建立された由、深く遠く聖人の真精神が地下水の如く流れ行きますやうに念じてやみません。

○又目下米国の青年学生間によく読まれてゐる『惠みの仏陀』をカリホルニヤ州レードレイ市の木村師から寄贈をうけました。手頃の仏教聖典で、今後種々補修せられて、世界人に愛読される日を願つて居ります。ブルト氏著。

○△『信仰書簡』は、池山先生著の「絶対他力と体験」の序文に掲げられた、先生御夫妻の御書簡であります。奥様の御病気を御縁として、一切の光が消え、頓むべき何物も崩れた刹那忽然と大悲の願船に浮ばれた尊容、仏陀の慈光の無限に輝き、そこにおのづから「衆禍の波転じ、転悪成善」のめぐみを御身にかけて御信嘗下さいました事実を再録して有縁の方々に送ります。

△『衆禍の波転ず』の近角先生の御講話は、丁度池山先生宅の御見舞直後の御感話として、大正七年の頃を現前せしめて、先生の信眼に映じる信生活の実態を嚙んでふくめる如くに御説き下さつてあり、御縁深い池山先生と誌上で談合していただきました。

特に仏心にひらけ行く心は、しがみつき念仏でも、つきまかし念仏でも、また、しやうことなし念仏でもない点を明かにお教へ下さつてあります。

△松江岩人師は、御老体ながら御健在で、広島県鞆町、明円寺の御住職として御活動して居られます。池山先生と御縁の深い方で、先生御逝去の日も京都に走せ参じられました。この原稿は先生を追慕する書、呼子鳥から頂きました

△『信謗共に因となつて』の聖人の御持言は、その片鱗しか述べられませんでしたが、いづれ他の御持言と共に、順次信味させて頂きます。

聚墨生　記

御案内

毎月、第一、二、三日曜、午后一時半。日曜講話。南区駅上町、一道会館。

定価　一部　十七円（送共）
半年　百円（送共）
一年　二百円（送共）
名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二
印刷人　奥川正生
名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番